

女優及川道子と

及川家の人々

十四回生 柿崎眞吾

千里山会の会員の方の中に、女優及川道子さんを知っている方はどの位おられるでしょうか。昭和初期の松竹が大船へ移る前の蒲田撮影所時代に彗星のように現れ、二六歳の若さで大戦も知らず世を去って行かれたトップ女優の及川道子さんと千里山との繋がりをどうして書くことにしたか、それは九十年前からの及川家と柿崎家の繋がりに始まります。

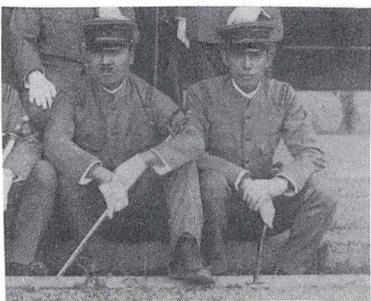
私の父嘉男のアルバムの中に及川家との写真が五枚あり、その中の一枚は道子さん一人のもの、もう一枚は道子さんと及川ファミリーに私の父も入ったもの、そのほかは若かりし軍隊時代の及川武壽様と私の父とのものです。

この二人が知り合ったのは、成年になって入隊した

当時最強(?)と言われた大阪八連隊で、大正初期ですから戦争に行かなかった戦友同志とでも言うのでしょうか。当時専門学校以上を出ていると一年志願兵という幹部候補生のような制度があり、入隊金に百円とも二百円(二年間三食付、当時帝大出の初任給が六〜七十円)とも聞きました。教育が終わると少尉にしてくれた、いかにも大正時代らしい制度があったようです。

数年経って開発間もない千里山住宅に二軒置いてお互いに住むようになりました(昭和八年の「千里山町内組合区分表」の第七区にあり)。噴水から南へ赤壁薬局の次の角が我が家で手前を西に坂を日曜学校の河邊家の方へ上がって左側の四軒目が及川家、二軒筋向かいの河邊満壘様と及川武壽様は関学の野球部でバッテリーを組まれた仲とも聞いています。武壽様は東京の麻布中学で投手をされてました。

稿末の及川ファミリ



左・柿崎嘉男 右・及川武壽



頃の松竹蒲田撮影所の頃
(昭和6年撮影 原寸大 本人自筆)

一の写真は昭和六年に千里山の及川家の庭で撮ったもので、既にトップ女優になっておられた道子さんが、東京から関西ロケの帰りに父上と千里山の叔父の及川家に泊まれた時のものです。武壽様から「道子が来るから来ないか？」と誘われて父は入ったようでした。

道子さんは、これから七年後に惜しくも早世されておられます。当時松竹三羽鳥(カラスとは妙ですがその頃そう言われた)は、明治四十二年生まれの田中絹代、四四年の及川道子、四五年の川崎弘子だったそうで、その後松竹が力を入れた大正生まれの若手の三人に、逢初夢子、高杉早苗、桑野通子と続いています。

千里山会員には、大阪まで映画を観に行くにはまだ幼かったし、また教護連盟のうるさい時代でしたから、昭和一杯の時代に活躍された道子さんを知る人は殆どないと思いますし、私も知らない一人です。偶々父からよく話を聞かされていたことと、親友の勇君(十四回生)の従姉ということ、今日まで特別の関心を持っていました。

なによりも映画の黎明期の異色の女優であり、美貌はもとよりですが、お人柄が及川家の人らしい素晴らしい女性であったこと、最近道子さんの付き人をされ

ていた方とお会いし一層その感を深めたこと、それと、戦中に千里山を去られた懐かしい及川家の人々を思い出し、この稿を起こすことにしました。

女優 及川道子の生涯 一九二一年(明治四四年)十月二〇日、東京府豊多摩郡渋谷村(現在の渋谷)に生まれ。渋谷尋常小学校卒、東京音楽学校一橋分校声楽科に入学、在学中から小山内薫に見出され、築地小劇場に入る。初舞台は十三歳の二四年十二月、青い鳥、その後三人姉妹で認められ、音楽学校を出る頃には、埋もれた春で主役、ウィリアム・テル、桜の園その他に出演している。努力家の道子は本郷の第一外国語学校英語専科に入学、高等科を修了、二八年に国姓爺合戦で杉村春子、細川ちか子らと梅檀皇女に扮したのが舞台女優としての最後となった。

二九年築地小劇場が分裂したのである。

その年の十八歳の七月、映画評論家の内田岐三雄の推薦で松竹入りとなった。蒲田撮影所である。デビュー作は菊池寛原作、清水宏監督「不懐の白珠」高田稔と組んで華々しい門出を飾った。その後同監督のものに立て続けに数本出演、同年入社岡田時彦(茉莉子の

父との共演が目立つが、従来の蒲田女優に見られなかった、知的でスマートな容姿と演技を見せた。三〇年、五所平之助監督「女よ、君の名を汚す勿れ」では、まれに見る清楚なキャラクターを創造、とくにインテリ階級に絶大な人気を博し、蒲田映画に新鮮な息吹をもたらして、大衆人気の田中絹代と人気を二分するようになった。

しかしその頃最初の胸の病を発症する。一年近くスクリーンから遠ざかる。その間予定していた道子の代役に田中絹代を立てて凌いだ時期があった。

しかし彼女は病にもめげず再起する。島津保次郎監督「野に叫ぶもの」共演鈴木伝明、清水宏監督「愛の防風林」共演大日方伝、野村芳亭監督「女性の切札」共演高田浩吉、時代はトーキー映画に移り、清水、島津両監督のもとで、岡譲二、江川宇礼雄と次々に共演、五所監督の「愛撫」での岡田嘉子との顔合わせでは、タイプの異なる女性像をそれぞれ好演して印象を濃いものにした。月形半平太に林長二郎(長谷川一夫)の相手役・梅松で芸者を神妙に演じ愛好家を驚かしたが、間もなく彼女は二度目の発症で一年以上も病臥をよぎなくされる。

しばし撮影中に倒れ、若くして逝った、美人薄命という言葉は彼女のためにあるかのようであった。

及川道子といえば、実生活では敬虔なクリスチャンとして知られ、魍魎魍魎が住むといわれる映画界では珍しい公私にわたる清純派。短くも美しい生涯は、永遠の処女神話となった。

(協力 松竹大谷図書館)

道子の「付き人」いまも健在

二〇〇六年四月の或る日、及川道子さんの「付き人」をされていた九〇歳になられる女性の方が、厚木に住んでおられることをひょんなことから知り吃驚しました。その情報元のさがみ女性史研究会「さねさし」という会の代表者内山良子様にお会いして葉書を出しました。早速お電話を頂戴し快くご協力を約束してください、付き人の方に引き合わせてくださるというのです。

その会が二年前に出された二四〇頁に及ぶ立派な冊子「あつぎの女性二〇人」聞き書き集」の二〇人中に「女優及川道子の付き人として・・・後藤フミ」とあり、当時聞き取りをされた中村碩子様が車で本厚

三五年再度復帰した第一作、佐々木康監督「眞白き富士の嶺」は明治四三年一月七里ヶ浜で遭難した中学生十二名を悼む詞をつくる女教師三角錫子を演じて犯しがたい気品をみせた。その羽織袴姿の道子には凄絶な美しさすら感じたという。ガードンの曲に合わせた三角錫子の「七里ヶ濱の哀歌」の詞は、二四歳の若き晩年の及川道子に重なって映っていたのかもしれない。撮影所も大船に移った。最後の作品となった横光利一原作・島津保次郎監督「家族会議」はヒロイン仁礼泰子をつとめたが、病も進み悲壮な出演になった。共演には松竹の次代を背負う佐分利信、高杉早苗、桑野通子、それに高田浩吉も共演した。三六年四月封切り。

三七年病氣により退社。

三八年(昭和十三年)九月三〇日没 享年二六歳

松竹名画クラブ 一、二五より

清潔、というよりもむしろ少々過度に潔癖で、内向的な女性をよく演じた。それは強くて面白い近代的な知性と自我の現れと見え、そのために一部には熱烈な崇拜の対象にもなる清純的な美女であった。病身でしば

木の駅から後藤様のお宅へ案内してくださり、お二人のご厚意に感激しました。

聞けた七〇年前のリアルなお話

厚木郊外の素敵なお宅で待っていてくださった後藤様は高齢ながら豊饒(かくしやく)として、声の張りといい、記憶の正確さといい、往時の道子さんを彷彿とさせるお話ぶりには驚きました。

「及川家の子供さんの名前を憶えていますか？」と聞くのと「ミチコ、キョウコ、カズオ、フユオ、ユキコ、シロウ」とスラスラと答えられるのです。当時の情景や道子さんのお人柄など、後藤フミ様(以下フミさん)のお話をそのままお伝えするのが、なによりと思える。できるだけ正確に記述することにしました。

フミさんは一九一五年神奈川県愛甲郡相川村戸田(現在厚木市戸田)に生まれ、小学校を卒業して三年後に校長先生の世話で代々木のフランス料理店に働きに出しましたが、行き違いから駄目になり途方にくれていました。隣の布団屋に出入りしていた魚屋が、「お得意先で女中さんを欲しがっているところがあるよ」との話に、住み込みで働くようになった先が渋谷金王町の及川家でした。

映画俳優の家と聞いて行きましたが、映画を観たこともなく、長女の道子さんがその俳優で、家の中はどいうやら道子さんを中心に回っているようでした。父上と母上お二人でマネージメントをされていました。父上はすでに中央公論を辞められ、母上は廣島のミッシヨンスクールを出られたお医者様のお嬢さん、お二人ともクリスチャンで、父上は霊南坂教会のお役を持つておられました。道子さんも撮影所のない時は礼拝に行かれました。インテリのご家庭という印象でした。

道子さんが映画俳優になる前のことは追々判って、東京音楽学校一橋分教所の声楽科から築地小劇場に入り、小山内薫先生に見い出されて舞台俳優をされました。女でも惚れ惚れするような綺麗な方で、和装洋装どちらでも似合う方でしたから、きつと松竹は栗島すみ子さんにつづいて若手を売り出そうと道子さんを引っ張ったんだらうと思いました。

よく勉強される方で暇があればお部屋で本を読み、聖書もよく読んでおられました。役が決まれば責任感から凄く集中力で台本に向かわれ、部屋に入るのが恐いぐらいでした。本当に芯の強い方でした。舞台出身ですから演技することに敵しい一面、お好きだったん

です。

ある時母上から、私に「付き人」になつてくれないかと言われました。母上にはフアンの応対、オアシス（道子さんのフアン会誌）の原稿集めや発刊、次の妹さんはドレメ出身で洋服担当、撮影所での着付けは素人の私がすることになりました。道子さんは日本髪のはかは髪も自分で結われました。衣装屋さんの着物は嫌がられ戸越の小母さんの見立てと仕立て、着付けは襟を抜いたりして粋に着せられるのを嫌って、私に注文を付けて着ておられました。

わたしも一所懸命でした。撮影の時は控えの部屋に一日詰めて、帰りは一緒に電車で帰る時も、地味な身なりとお化粧の方なので乗客に気付かれることはありませんでした。撮影所では俳優さんはお互い口を利くことは少なく、それでも道子さんは新劇から入って映画では後輩なので、田中さんや川崎さんにも必ず自分から先に挨拶される礼儀



後藤フミ様(右)と筆者

正しいお方でした。

青山の立派な家に引越し私も一緒に参りました。昭和十一年の二月の雪の日、表へ出ましたら異様な感じで軍人達が行き交っている・・・二・二六事件だったんですね、その時は訳が解らなかつたですよ。

その頃はもう病魔が道子さんを再起が難しいほど蝕んでいたんですね。

この年から青山と千里山の両及川家に大きな不幸が訪れました。

千里山では一家の柱の父上武壽様が狭心症で急逝されたのです。これは幼い私の記憶の始まりでもありません。日が暮れて勝手口から洋装の二人の女性が息を切って入って来られ「及川死にました」と告げて帰られたのです。母上好美様と伊藤の伯母様ということでした。翌年母上は四人の男の子とともに、噴水の下の阿久根理髪店の下隣りで、洋裁店を兼ねた洋品店を開業されました。

青山では道子さんの肺結核につづいて、父上がカリ

エス(結核)を発症されました。代々木上原のお屋敷町に引越してからも、責任感の強い道子さんの撮影所通いはつづきましたが、体の弱ってきた道子さんには体力の要る主役は無理になり、さりとてプライドから主役のほかの引き受けは辛いことでした。「家族会議」を撮つてからは、お部屋でおやすみの生活が多くなりました。新鮮な肉汁がよいというので父上が絞って飲ませてあげてました。道子さんもつと生きたかったんだと思います。

フミさんの仕事も家の中の仕事が多くなり、母上は見舞を兼ねたフアンへの応対と会誌の仕事のほかに、掛かり付けのお医者様の相手とお二人の看病にかかり、上の妹さんとフミさんは家事と弟妹達の学校の送り迎えや世話に当たりました。見きれない時は、母上から頼まれて愛甲のフミさんの実家へ二・三人纏めて泊まりがけで連れて行き、二・三日野山で遊んだりしてまた帰つたことも度々でした。弟妹達はとても喜んでくれました。母親の役目を分け合っていたようなのです。フミさんへの信頼はとても大きかったようです。

昭和十三年、道子さんは二六歳の若さで召天なされ

ました。育ちの良い異色の女優さんで、顔立ちばかりでなく心も綺麗な方でした。声楽の素養があったので声も綺麗で、よく讚美歌を歌われてました。

フミさんは道子さんと過ごした娘時代を、七〇年の時を経た今も誇りに感じておられます。

支那事変も泥沼に入り、千里山では及川家につづいて伊藤家にも一家の柱の父上のご逝去があり、昭和十五年に及川家より先に千里山を去られました。

戦争による物資不足から配給制度になり、大東亜戦争勃発、及川家の母上好美様は京都の女学校の先生に転職されることになって、育ち盛りの子供達とともに昭和十七年三月、千里山を去って行かれました。引越しのトラックを見送るとき、幼い進ちゃんが嬉しそうに乗っていたのが目に浮かびます。

数週間経った頃、私は観月橋のお宅へ遊びに行きました。母上はお仕事に出でおられ、長兄の實さんがカレーライスを作ってご馳走してくださいましたのが今も忘れられない思い出です。

及川家の皆様は、あの凛とした優しい母上を中心に素晴らしいご家庭でした。眞さん、勇さん、進さん、

みんな幼少年の教育に生涯を賭けられたのも、あの母上と二重写しに見えてなりません。

實さんは私の心から尊敬する方、秀才で長男の重責から早々と一家を背負われ、敬虔なクリスチャンとして、昭和二十七年、道子さんと同じ病で同じ年令で召天なされました。写真に道子さんが實さんの肩にやさしく手を置いておられるのも印象的に思えます。

眞さんは会誌八号・一四一頁に、勇さんは六号・九頁に、進さんは五号・五七頁に、千里山会誌にご協力いただいております、心から感謝申し上げます。

厚木の後藤フミ様、「さねさし」の内山良子様、中村碩子様には、この度いただきましたご厚志に、心からの感謝と御礼を申しあげます。

松竹大谷図書館には資料閲覧でお世話になりました。感謝申し上げます。